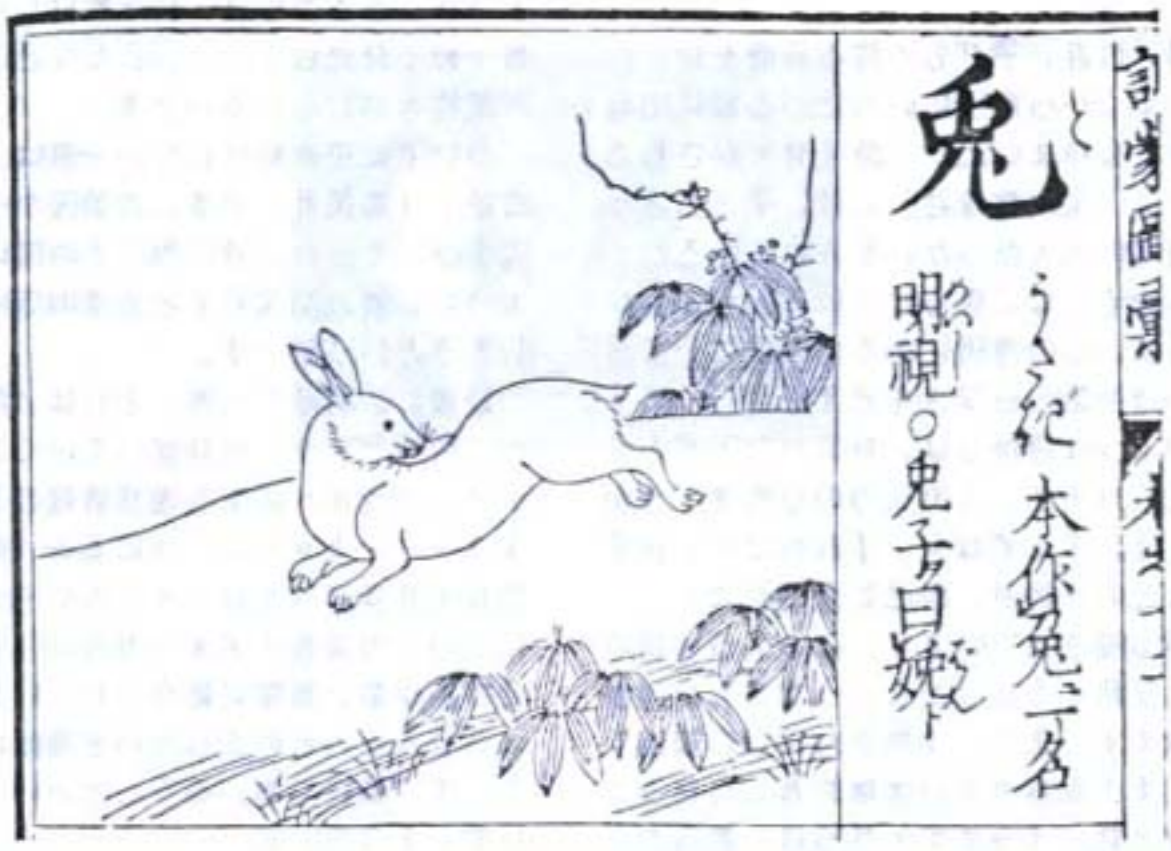
藤女子大学
藤女子短期大学

No. 26

図書館だより

'87. 1



目　次

新春随想特集
無気力の周辺 ―― 中野　茂 (2)
学問と無駄について ―― 吉川弘一 (3)
《読書》・その前後 ―― 丸山隆司 (4)
"星を近づけた人びと" ―― 岡崎幸子 (5)
シュマウス文庫のこと ―― 落合健一 (6)
自己紹介による
図書館職員ラインアップ　4 ―― (7)
佐藤昭子・戸村倫子
夢に咲く花　4 ―― (8)

無気力の周辺

中野　茂（児童心理学）

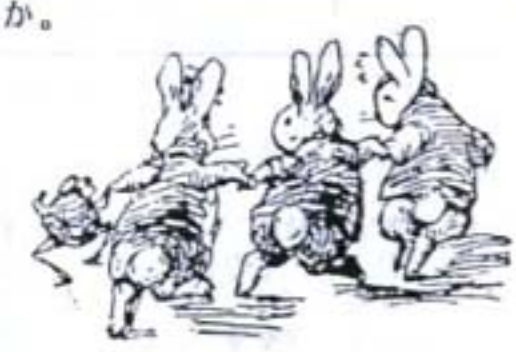
新年おめでとうございます。男の兄弟で育ち、男性優位の世界で過ごしてきた私が、本学に職を得てほぼ2年、今や、形勢は全く逆転しました。進路を塞ぐように溢れ出てくる華やかに着飾った、賑やかな“波の花”をかわすにかわせず、四苦八苦の毎日が続いています。しかし、これも宿命かもしれません。私の専門の発達心理学では、乳幼児、母子関係に研究が集中しています。その結果、母親や保育者などの女性ばかりとの出会いは避けられないことになったのです。髭を生やした動機もこの辺にあるのかもしれません。

閑話休題。最近、子どもの寝る時間を親に合わせたり、早くから集団にいれたがる親に出会うことが多くなりました。「急（せ）かされる子どもたち」（家政教育社）には、子ども達がどれほど過度の大人あつかいをされているか、何が親たちをそんなに焦らせているのかが論じられています。この背後にある幼児期に全てが決まるという神話の根深さを考えさせられます。更に、このような急かしは、無気力な子どもを生むと考えられます。「無気力の心理学」（中公新書）には、『ぐずね』、『お前だけできそこない』などの一言が、自己効力感を潰してしまうことが示唆されています。このような親の言葉には、変動する社会がもたらすストレスが感じとられます。また、「無気力からの脱出」（福村）、ナチ収容所での体験を著したフランクルの「夜と霧」（みすず）からは、無気力を克服するための示唆が得られるでしょう。

ところで、無気力の一因は、画一的指導に陥っている学校教育もあることを、「知力と学力」（岩波新書）は、如実に示しています。この本からは、生活から遊離した、試験が終ればパーっと消えてしまうような“学力”や“いつかは役に立つ”式の教養主義の無意味さを考えさせられます。また、「大きな学校、小さな学校」（新曜社）では、大規模校では多数の“アウトサイダー”を生み出しているという問題が述べられています。一方、「教室にマイコンをもちこむ前に」（同）では、LOGO（画面の上に思い通りの形を描ける言語）による小学校での学習が紹介されています。コンピューターを毛嫌いする人もまだ多いと思いますが、最近のゲームには高度の思考力を求めるものも少なくありません。ゲームに熱中する動機は何なんでしょうか。ある学生は、私が数日かかった解法を数十分で発見しました。こんなところに教育的可能性を感じられるのです。

ついでに是非紹介したい一冊は、「23分間の奇跡」（集英社）です。占領国から来た新しい先生が、たった23分の間にその国に好意を抱くように、被占領国の子ども達の気持ちを変えてしまうという話です。

最後に、初夢を一言。それは、将来、図書館が、情報センターへ発展していくことです。ビデオ、スライドによる視覚情報の公開、コンピューター・ネットワークによる、世界中と生の情報の交換が含まれます。A女子大生が、戦争についての調査をアメリカ等の若者に行ったことが、以前、新聞に紹介されていました。このような人と人とのふれあいを可能にしていくことこそ“情けに報いる”ことといえるのではないでしょうか。



学問と無駄について

吉川弘一　（英文学）

英語に“liberal arts”という言葉があるが、これはラテン語の“artes liberales”を英語に直訳したもので、更に日本語にそのまま訳せば「自由人のための諸学芸」くらいが適当だろうか。中世の頃の7つの学問分野をさして使われた言葉であると、英和辞典には載っている。しかし時代を中世に限らなければ、その昔、仕事を奴隷達に任せておいた自由人達は暇を持て余していて、やることといえば考えること位のもので、彼らは何となく一箇所に集まり、ああだ、こうだと当面の生産的労働とは無縁の消費的な活動で暇を潰していた。その集まった場所が“school”となり、彼らは“scholar”と呼ばれるようになった（どちらも語源は「暇」）。

学問とはそもそも金と暇のある人間が実利的な世間から隔たった象牙の塔に引きこもり、さしあたって何の役にも立たない種々雑多な思索に身を捧げることをいうのではないだろうか。現代のように社会が豊かになり暇人が多くなると大学が開かれてしまい、市民のカルチュアセンター化するといった事態が生ずる訳だが、それはそれで大変よいことであろう。問題は寧ろ、このような裕福な時代にあって尚「手に職を持つために」或いは「社会に役立つために」学ぼうとするお利口な人間が次第に増えてきて、大学の多くがその社会の趨勢に流され半ば専門学校化しつつある最近の傾向である。専門学校と大学の大きな違いといえば、専門学校の技能は社会に即役立ってしまうということ、専門学校には一般教育科目（“liberal arts”）がないということ、そしてそのような雑多な学問分野の書物を有する図書館がないということであろう。

ある哲学者は書店で本を買うとその場でいきなり表紙や扉のページなど無駄な部分を破り捨てたというが、とんでもない話だと思う。表紙とか余白の全くない書物などとても読めたものではない。或いは、不必要な空間だからといって天井をうんと低くした建物を想像してみればよい（この大学のよいところのひとつは天井がやけに高いことだ）。人間は無駄なものがなければ生きてはゆけないのだ。いや逆に、無駄なもの、余分なもの、役に立たないものを生み出す能力こそが人間の人間たる所以なのだろう。それを世間ではやや気どって「文化」と呼び、個人に備ったものを「教養」という。いずれにせよこんなものは人にひけらかす以外には何の役にも立たないものである。しかしこうしてひけらかすこと、思わずもれ出る無駄な教養、文化こそが、動物的にではなく人間として生きてゆく上でとても大切なことなのだと思う。

その昔、僕が苦学生だった頃に「貧乏は罪悪だ」とある友人に言われたことがある。その時初めてけちや貧乏は思想に反映するものだということを知ったように思う。もし学生の中で家が貧しい者がいれば奨学金（“scholarship”）によって余裕（“schola”）を獲得しなさい。それが駄目なら図書館をどんどん利用しなさい。藤の図書館はなかなか立派なものです。という訳で、この駄文も何とか図書館だよりにふさわしいものになったかも知れない。

《読書》・その前後

丸山隆司　（国文学）

アンチ・オイディプス、女歌（おんなうた）、萬葉以前、日常性の構造Ⅱ、象徴としての商品、日本のなぞなぞ、野うさぎの走り、性の歴史1・2、異形の王権、アイヌ神謡・聖伝の研究……。

9月ごろから読んだ、あるいは読みかけた本のリストだ。

ぼくは日本の古代文学が専攻なのだが、外からみると、まるで古代文学とは関係なさそうな本がならんでいる、と思えはしないだろうか。いくらか直接にかかわるとしても、数冊だといえる。このリストはほとんどメクラ鍋に等しい、ではないか。でも、これが、ぼくにとっての《読書》の現状なのだから、しかたがない。

もちろん、これ以外にも講義・演習にかかわる本は見ているし、万葉集・古事記などもみないわけにはいかない。それに加えるなら、雑誌論文だってかなりの数にのぼるはずだけれど。

じつは、最近、とみに本を読むことに熱がはいらない。商売だから、本と縁が切れるわけではないけれど、本に執着するという欲求は、以前ほどではなくなってしまっている。だから、“本”っなんだ、と問いかけることが多いのも正直なところ。たいていは、一度読めばそれまでだけど、何度も繰返し読む本は、それほど多くない。というより、“読む”こと自体に不安があるからだ、というよりはかにない。

“読む”ってなんだろう、という問いになってしまう。読めば、たしかに知らなかったこと、気づかなかったことがわかる。というより、知らなかったことを知る、気づかなかったことに気づくことになる。そうなると、知らないこと、気づかないことがいっぱいあるのだということが不安になってしまう。そこで、ためいきをついてしまえばそれまで、知的欲求は萎えてしまう。が、じつは、そのためいきは、知的欲求というものの恐ろしさへのためいきなのだ。<知>はどんどん集積されてゆく、つまり、知らないことがどんどん増えているのだから、いったん知的欲求などというものにとりつかれるとやっかいなことになる。

“本”だって、けっして安くない。欲求を充すためにはお金もかかる。体力も時間もかかるのだ。いつの間にか、自分が<知>を喰う怪物のように見えてくる。いくら喰っても、<知>は眼の前でどんどんふえてゆく。

で、しかし、<知>で肥満体になったからって、なにかいいことがあるのだろうか。

肥満を解消するために、ジョギング、ジャズダンス、テニスでもやることが必要なのだろうか。それにしても、<知>の肥満体にとって、ジャズダンスのようなものがあるのだろうか。いいかえれば、<知>の行方は、肥満しかないのだろうか。

<知>の集積、あるいは<知>の占有から、ダイナミックにその発生の場所へ戻るために、どんな運動が要るのだろう。あるいは、ジャズダンスどころではない力が要るのかもしれない。

もっとも、一番てっとりばやく、身近な方法は、“本”と縁を切ること、読まないことだが、それが、じつはもっとも力の要ることのようにも見える。

とりあえず、いま、<知>の肥満症状にかからないように心がけているのだけれど……。

“星を近づけた人びと（上・下）－斉田博－”

岡崎幸子（調理学）

仕事がら、雑誌や文献などに目を通す事に気をとられてしまい、書見などというものから縁薄き日々を送っています。化学理論やら構造式が列を成している文献などは、念入りに頭の中を整理して順追って詰め込んでいかなければ、到底、私の読力では混乱が生じ、相当な体力と精神力を使い果してしまいます。このような日々の中で、今、星をボンヤリ眺める事が心安らかなときです。星の輝きを見ることが好きで、学生時代には、曇天の夜空のかわりによくプラネタリウムに足を運びました。そして、手の届かぬ宇宙の光に感動していました。ここに紹介する本は、私を星に近づけたもののひとつです。

この本は、「月刊天文」に連載された「おはなし天文学」をまとめたものです。その一部をおはなししてみましょう。

ハリー彗星によって名を残したイギリスのハリーは、セントヘレナ島で数々の発見を行い、「南天恒星目録」の出版に至る彼の天文観測への情熱が描かれています。興味深いことに、ニュートンの偉大な発見の源に彼の研究が関わっていたのです。当時、20代という若きハリーの偉業には、信じられぬほどの精神的強さが感じられます。また、94歳まで星にロマンを抱き続けた“あごひげおじさんバンビー”の情熱も見事です。彼こそが、星に魅了されている人々の代弁者であり、観測者でしょう。著者とバンビー教授の出会いは，フロリダでの日食観測のときでした。そのとき、バンビー教授は、90歳という老齢でした。二度目の観測も曇天日食となり、彼は、生涯太陽が美しいコロナを放っている中天を見ることができなかったのです。彼の一生をかけた観測をもって、宇宙の超自然を目に焼きつけることができませんでした。考えも及ばぬ宇宙の無限に比べたら人間の存在はほんのちっぽけなものにすぎません。しかし、この超自然にロマンを求め、挑んだバンビー教授は、今、星の代弁者となり、私たちを見つめていることでしょう。

有名無名の数多くの天文学者たちの人間味豊かな一生を“星を近づけた人びと”により楽しんでいただければ幸いです。

私たち人間の存在は、星の一生に比べたら、小さな点にすぎないのです。だからこそ、力強く生きていきたいものです。

夜空の星は、冷たい北風の中で輝きを増し、星の光が、満開に咲きほこっています。北東の空には、蛍のような群れを成してスバル、プレアデス星団が、何万光年も果てから美しい輝きを今宵も放つ事でしょう。

シュマウス文庫のこと

落合健一　（哲学）

昭和３５年８月はじめの暑いときだった。西ドイツから大量の書物が我が校に贈られてきた。翌年藤女子大学開設を目指して丁度我々は準備中であった。贈り主はドイツのカトリック信者達、世話人はミュンヘン大学のカトリック神学の権威者で後の大学総長シュマウス博士だった。当時まだ敗戦の痛みの残っている日本の北海道にカトリックの女子大学ができるというので、ドイツの信者達が各家庭から厚意の書物を持ちよって援助しようという事であった。

書物は小樽に荷揚げされ、そして小樽税関から、学術研究の為の書物であるので輸入税は免税扱いとするからすぐ手続きをとるようにとのこと、そして幾つもの木箱に入れられた書物が先に送られて来た。

現在の３１０教室の机上や床の上に積み上げられた書物を、確か一週間以内で大まかに分類し、ＡＢＣ順に並べて一覧表を作らねばならない。当時の図書館長山北先生に頼まれて私が中心になり、ドイツ語がわかりタイプの打てる人を集めた。卒業生の新妻さん、大窪さん、野島さん、学長の甥で医学生の牧野君、シュヴェスター・ラインガルディスさん、東京在住のドイツ人で夏の休暇で札幌に来ていたミューラー神父さん等に集まってもらった。練習室から英文タイプライターの良さそうなのを何台か運んできて交代で原紙に打ち、謄写印刷器で印刷した。ウムラウトを後で手書きする事はかなり面倒な事だった。

書物というものは埃の多いものである。毎日汗まみれ埃まみれになった。書物のうち圧倒的に多いのはドイツ語である。次がフランス語、その他は英語スペイン語イタリア語ロシア語等がわずかばかり。書物の内容から言えば宗教書が断然多い。第２バチカン公会議の神学顧問を勤めたシュマウス博士自身のカトリック教義学の全集もある。教父全集や教会公式資料もある。これ程多くの宗教書が贈られて来たことは、ドイツの一般家庭に多くの宗教書が常備されている事の証拠なのだろうか、と当時疑ったり感心したりした事を覚えている。その疑問と感心の気持ちは私は今も同じ。ゲーテやシラー等の文学書もかなりあったが、皆古いドイツ文字、つまり亀ノ子文字であった。

私の手元にその時作ったリストが１部，今もものこっている。これは作業用に使った中間段階のものだと思う。書物の配列の間違いや誤字を訂正する鉛筆の書き込みが至る所にある。当時のタイプ原紙も良質とは言えないのですぐしわがよって印刷し難く、印刷された文字もつぶれたりかすれたり二重にずれたりしたものが多数ある。とにかくタイプの打ち直しを相当にやった。なにしろ全員素人ばかりが集まってやったのだからしかたがない。当時私も今よりずっと若かったし、若い連中が暑い中を無報酬で集まって、数日間だが大騒ぎしながらこの仕事を完成させた時、どのような完成祝いをしたか残念ながら私には全く記憶が無い。

その１月後昭和３５年９月には文部省に藤女子大学設置認可申請書を提出することになっていた。そのために大学に備えるべき図書数の最低限は、このドイツからの寄贈図書が無くてもどうやら確保出来た頃だった。しかしこれが加わったことによって余裕ができた。そして「我が大学はこのように外国からの援助が得られるのですよ」ということが世間に対していささか説得力のある時代だった。

これだけの量の書物を図書館で分類整理して正式に受け入れるにはこれからが大変である。当時私が考え心配したことは次のことであった。うちにはドイツ文学科がない、ドイツ語はどうしても後回しにされる。多量の宗教書、それもドイツ語の聖書や祈禱書や修養書は特別の人でないかぎり一般の人の関心はひかない。ドイツ語のできる卒業生を２人図書館員とし、この仕事に専念してもらっても５年かかりそうだ、ま

たそういう事を考えること自体が頭から不可能視された。３５年当時図書館員の数は館長の下卒業生が２人だけであと臨時の若いシスターが１人いたかもしれない、そのような時代だった。

整理は進まなくともこれらをシュマウス文庫として一まとめにし、一時的な貸出規定を作って散逸を防ぎ、利用希望者には「慣れ」による貸出ではなくて「規定」によって利用出来るようにすべきである。そうすることが贈ってくれた人々に対する礼儀だと思う。そういうことを昔学長や図書館長に話したが、覚えていらっしゃらないだろう。

現在でも整理は終わっていない。図書館の鈴木さんが他の仕事の合間を見ながら１人こつこつ整理を続けている。１８００年代の古い書物がかなりあり、１７００年代のもある。古い書物は多く傷んだり汚れたりしている。それを丁寧に汚れを取り傷みを修復すると昔の製本業者がいかに心をこめて手作りしたかがわかる。丹先生も退職後暫く図書館に通って来て下さって点検整理を手伝って下さっていた。

最後に考えるべきことはドイツも日本と同じように敗戦のひどい打撃を受けた国である。そのドイツの人々から私達は厚意を贈られたのである。日本がＯＥＣＤに加盟して先進国になったのは昭和３９年である。それまでは後進国だった。今は私達が後進国の人達に厚意を贈る時である。

自己紹介による

図書館職員ラインアップ　4

戸村倫子　奉仕部

貸出カウンターを担当しています。仕事は想像していたのとは大ちがいで今では力仕事にも自信がつきました。見た目は単調な仕事に思えるかもしれませんが、利用者の反応に直に触れることができ、勤めて３年目の今でさえ何かしら新しい発見のある毎日です。図書館について私の学生時代を思いおこしてみますと、有効に活用したというよりは、私にとっての図書館は自分の部屋とはまたちがった居心地がよく落ちつける場所でした。特等席は閲覧室南側の窓辺。ぽかぽかと暖かい上に懐かしい中高校舎や大好きなキノルド館、そしてマリア像とそれをとり囲んでいる色鮮やかな花壇…ここから眺める絵のような景色は最高です。家ではほとんど勉強らしいことはせず、予習やレポート、卒論などすべてここで仕上げたものでした。そして今も貸出の合い間にカウンターから少し遠くなった同じ景色を眺めるほんのひとときを楽しんでいます。

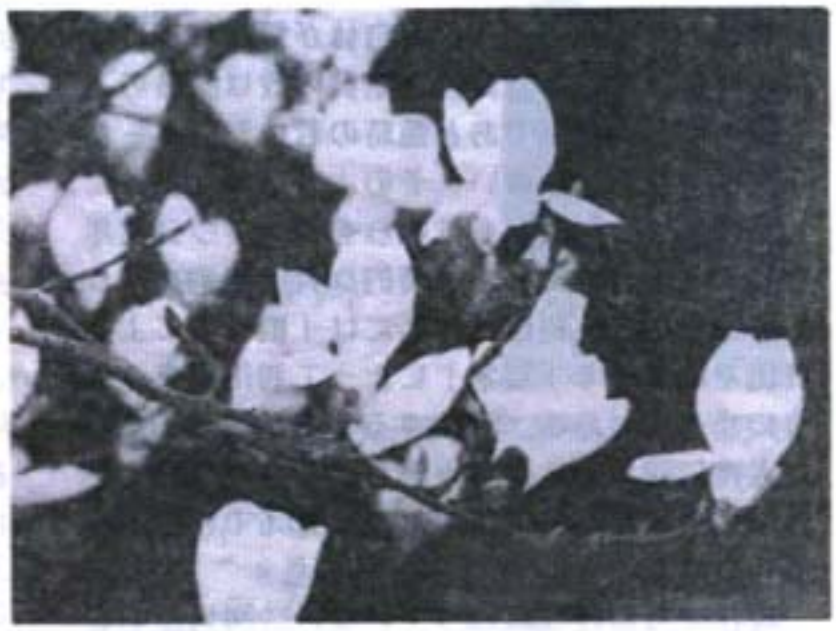
佐藤昭子　整理部

図書を手にすると何時の間にかその世界に浸り時の流れを忘れるでしょうが、一瞬にして私は現実へ戻らなければなりません。図書が与えてくれる世界から抜け出て図書を分析し、主題、書名、著者名、出版事項などを、目録として紹介するのが私の仕事だからです。受入された洋書はすべて担当しますので、今まで知らなかった多くの作家、作品との出会いに、心ときめかしたり、この図書の主題は何か等で悩んだり等の毎日です。

一階の図書館事務室にいますので皆さんと接する機会はありませんが、目録を通してお会いしているつもりです。私が学生の頃は学生は書庫に入る事は出来ませんでしたので、図書館の利用、即、目録の利用に結びついていました。今は誰でも自由に書庫に出入りできますので目録の在り方も以前とは違うでしょうが、書庫散策の合い間には目録巡りも楽しんで下さい。

藤に咲く花 4

ハクモクレン
Magnolia denudata Desr



柔らかな毛におおわれた蕾で冬を越し、早春のまだ寒い中で、学内の木々では1番初めに香りの良い乳白色の大きな花を咲かせる。コブシの花に似ているが、ハクモクレンは6枚の花弁の他に、白く大きな萼が3枚あり、合わせて9枚の花びらがあるように見えることから見分けられる。

原産地の中国では、この花の名を玉蘭と書いて"ユーラン"と呼ぶ。ハクモクレンは他のモクレンの仲間同様にマグノリア(Magnolia)属である。加藤憲市著『英米文学植物民俗誌』によると、一般にマグノリアの花は香りが強いので1輪でも寝室に置けば、1夜で人が死ぬといわれているとか…。北米インディアンは、この木の花期には、その木陰では眠らないそうである。

モクレンの花言葉は「自然愛」

写真撮影　公仕室　浦田　涯

☆卒業するあなたへ

在学中は図書館をご利用くださり、ありがとうございました。図書館では2年前から卒業生の皆さんにも、在学生とほぼ同様の条件でご利用いただいています。こう言っては何ですが、在学生より熱心な常連の方も見受けられるほど好評でして、昭和60年度の卒業生への貸出は300冊を大分こえました。

卒業してからも、読書や調べごとはついてまわります。近くの公共図書館ももちろん結構ですが、勝手知ったる母校の図書館も、遠慮なくご利用ください。身分を証明するものその他が必要な場合がありますので、入館手続きなど、詳しくは奉仕部の職員にお問い合わせください。

☆表紙図版　中村楊斎著『訓蒙図彙』（勉誠社版　「近世文学資料類従」所収）より採録しました。

☆後期試験期および春季休暇中の図書館の開館時間、休館日等につきましては、掲示をご覧ください。

○次号（27号）は4月に発行の予定です。

藤女子大学
藤女子短期大学　図書館だより　第26号　1987. 1. 1 発行

発行者　札幌市北区北16条西2丁目　藤女子大学図書館